
試験召喚のすすめ I F 過激派の過激派による過激派の為の試召戦争

秋雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

試験召喚のすすめIF 過激派の過激派による過激派の為の試召戦争

【Nコード】

N6864R

【作者名】

秋雨

【あらすじ】

試験召喚のすすめのIFストーリー
もし久遠光一がAクラスに入っていたら……と言うIFストーリーです。

いよいよ楽しみにしていた試召戦争が出来ると思気込んでいた光一は、振り分け試験の結果を見てあぜんとしてしまう。
そこに書かれたのはどうという訳か、試召戦争に最も縁がないクラス

である最高クラス、Aの文字。

代表ではない立場で、周りは勉学に励む真面目な生徒ぞろいなうえに、幼馴染で自身のお目付け役の優子の目まである以上、試召戦争を起こすなど夢のまた夢。

しかし、目をかいくぐりなんとしても試召戦争を！

と、Aクラスで暗躍するストーリー

第1問 謀略の始まり

文月学園、校門前。

そこで1人の男子生徒が、生活指導教師に1枚の封筒を手渡されていた。

文月学園における、振り分け試験の結果発表である。

「さてと、どこかな」

「楽しそうだな、久遠」

「そりゃあね、何せ試召戦争が楽しみでここに決めたんだから」

「そうか。まあお前らしいと言えはそうだが……」

男子生徒“久遠光一”がのりづけされた封筒を破り、その中の紙を開く。

“A”

「はっ？」

「生憎だが、お前の望みはかなえられそうにない」

光一はそこに書かれた文字を見て、目を点にした。

見間違いかと思ひ封筒に書かれている自分の名前から、もう一度確認し始める。

「予想はしていたが、やはりそうだったな」

「……あの、何で俺が」

「ギリギリではあるが、総合点が50位だったからだ。間違いはないぞ、何せ5回も採点し直したからな」

「ギリギリって……って事は、もうちょっとでBクラス代表だったのかよ。それより鉄人、5回もって信用なさすぎないか!？」
「確かに貴様は試召戦争で奪い取る方が性に合いそうだったな。これは済まなかった」

光一はその事実に対し残念そうにしていた。

何せ最高クラスである以上、試召戦争とはほぼ無縁なのだから。

「全く、Aクラスに配属されて落ち込む奴等お前位だぞ?」

「別に勉強が目的で来てる訳じゃないからな」

「何故お前の様な奴がAクラスなんだろうな?」

「それが教育者の台詞か!?! ……まあ良いか、Fクラスに期待をかけよう」

「ん? 久遠、お前まさか何か企んでいるのか?」

「滅相もない」

それから光一は急いで靴を履き替え、一路Aクラスに。

「……マジ?」

入口から見た光景は、明らかに普通の教室とは別世界。

黒板サイズのプラズマディスプレイ、各種飲料やお菓子が入っている冷蔵庫、個人用エアコン、システムデスクにリクライニングシート。

ふと見た先には、フリードリンクサーバー。

「……やっぱり何かの間違いなんじゃ」

自分のAと書かれた振り分け先を、改めて疑問に思う光一。

そこでふと、ある人物が入り口で突っ立ってる光一を見つけ、歩み寄る。

「ちよつと光一、何そんなところで突っ立ってるのよ？」

「あつ、優子」

幼馴染の木下優子。

優等生として有名ではあるが、光一としては何かとうるさい為苦手としている。

「ああつ、Aクラスの設備見に来たの？ でもそろそろ時間だから、自分の教室に行ったら？」

「いや、自分の教室って言うか……これ」

「ん？ どれどれ……は？」

先程の光一のように、表示されてる単語を見て目を疑う優子。

「……何かの」

「5回も採点やり直したとよ」

「間違……あつ、そうなの？ まさか光一がAクラスだなんて」

そのやり取りは、いい意味と悪い意味の有名な同士だけに目を引いた。

「とにかく、同じクラスになった以上Aクラスの一員として恥じない行動を取って貰うからね。みっちり監視するからそのつもりで！」

「えーっ！」

「嫌そうな顔しない！ ほら、その荷物ロッカーに入れて席に着きなさい」

「へいへい」

光一は愛用のボストンバッグを自分に当てられたロッカーに入れると、自分の席へ。

そのついでにフリードリンクサーバーで、優子が好きな飲み物と自分のを持って。

名字が近い所為か、近くには優子の席。

「同じクラスになるとやっぱり席が近いな。はい」

「当たり前でしょ、木下と久遠なんだから。あつ、ありがと」

「家も隣だしな。それにしても……」

自分に割り当てられたシステムデスクに目を向ける。

ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫。

リクライニングシート座り心地に文句など付けようがない。

「……慣れるのに時間かかりそうだな」

「そうね。それはアタシも思ったわ」

「あつ、ノートパソコンまであるのか。こりや至れり尽くせりだな」

「……？ ちよつと光一、試験召喚戦争に縁のないクラスに配属されたって言うのに、偉く落ち着いてない？」

「？ そうか？」

光一の目的は試験召喚戦争なのに、Aクラスの設備を見て子供の様に楽しんでる事に疑問を抱き始めた。

光一は勉強こそ偏りがあり、得意科目ではトップクラスだが苦手では最低ランク。

しかし光一の慧眼や決断力、判断力は優子自身も素直に尊敬出来る程優れている。

その光一が残念そうな雰囲気も見せない事に、優子は光一を刺す様

な眼で見る

「アンタ一体何企んでるの？」

「企むって、酷い言い方だな」

「とぼけないで。アンタがこの学校に来た目的は試召戦争じゃないの。に何で残念そうな雰囲気も見せず設備を楽しんでるのよ？」

「そうだな、ばれても特に問題はないし……っつと」

そこでチャイムが鳴り、1人の女性教師……高橋先生が入ってきた。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこのクラスの担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

彼女がそう告げると、ディスプレイに先生の名前が表示された。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、リクライニングシート、その他に不備のある人はいますか？」

「不備って、文句のつけよう自体がないけど……？」

「それは何よりです。では、始めにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に来てください」

名前を呼ばれて席を立ったのは、日本人形のような肩まで伸ばした黒髪が特徴的な少女。

クラス代表……最高クラスであるAクラス代表は、学年首席と言う事。

「……霧島翔子です。よろしく申し上げます」

男子だけでなく、女子までもがその様子に見とれ始める。

その中で淡々としているのは、光一位。

「Aクラスの皆さん、これからの一年間霧島さんを代表にして協力し合い、研さんを重ねてください。これから始まる“戦争”でどこにも負けない様に」

Aクラスともなれば、他のクラスを攻める機会はない。

寧ろ攻められる立場だが、光一はその中で笑みを抑えなかった。

HR後。

「当然の様に最新機種かよ……しかもスペックとか、ホントにそこらのより上か」

支給されてるノートパソコンのスペックの確認をする光一。

その安穩とした雰囲気、Aクラス全員は“これが本当に過激派筆頭？”という疑問を浮かべながら光一を見ていた。

病気じゃないかと疑うほど細く、モヤシと言う表現がぴったりな体躯。

優等生として有名な木下優子と、それなりに親しいとわかるやり取りを行っていた。

何よりこのAクラスに居る以上、成績もそれなりに良い。

どうみても過激派筆頭と呼ばれる様に見えない……と言うのが、Aクラスのほぼ全員の総意だった

「で、さっきの続きだけど、どういうつもり？」

「そこまでムキにならんでも……」

「アンタの考えはアタシも想像つかないからの配慮よ」

「Fクラスが早くて今日、遅くても今週中に行動を起こす筈だから、

それを待つてるんだよ」

「はっ？ どうしてFクラスなのよ？」

「FクラスがDクラスに宣戦布告したって！」

「よし、来た！」

「え？ ちょっと、一体どうして……って光一、ちょっと待ちなさい！」

「霧島代表、ちょっと良いか？」

光一が決起したように一路代表の翔子の元へ行くと、優子も慌ててそれに続く。

周りがどよめくが、翔子は特に気にする事なく光一達に顔を向ける。

「……何？」

「その前に、まずは始めまして。俺は久遠光一、名前くらいは知ってるだろ？」

「……過激派筆頭が私に何の用？」

「いきなりでなんだけど、Bクラスに試召戦争を仕掛けたい」

周りが先程と違う意味でどよめいた。

光一の真意がわからず、混乱する中で次席の久保利光が割り込んだ。

「ちょっと待て。Aクラスが他のクラスを攻めるだなんて、何の意味がある？」

「ちゃんと納得できる理由位用意してあるから、話くらいは聞いて欲しいね」

「……わかった」

翔子の言葉で皆が静まり、場所をソファーに移して翔子と対面。

「まずこの提案の理由は、FクラスがDクラスに宣戦布告をした事だ」

「……それでどうして？」

「この戦争、十中八九Fクラスが勝つ。だからAクラスはFクラスとDクラスの試召戦争に決着が付き次第、対Aクラス戦において戦略的価値のあるBクラスをおとす必要がある」

「……Bクラスに、戦略的価値？」

翔子はわからず、首を傾げる。

その場に居る殆ども理解できず、同じく首を傾げた。

「今は振り分け試験が終わってそんなに間がないから、クラス間の差自体がハッキリと出てる。だからこそこの時期は試験召喚戦争はせず、力を蓄える時期」

「……そう」

「逆に言えば、Aクラスに今一番近いのはBクラスだとハッキリわかってるって事だ。そのBクラスをAクラスに攻め込ませて疲弊させた所で仕掛ける、もしくはBクラスを自分達に有利な戦いに持ち込む交渉の手札に……とまで言えばわかるか？」

そこで周りが納得したように頷き始めた。

確かにそう考えれば、Bクラスに戦略的価値があると言つのも頷ける……が。

「……久遠の言いたい事はわかった。けどそれなら、事の渦中であるFクラスを攻めれば済む話」

「その通りだ。万が一の事も考えてリスクの少ない選択をすべきじゃないか？」

「甘い、俺に言わせれば危険なのはむしろ今Fクラスを攻める事だ。」

俺が何故Fクラスの勝利を疑ってないと思ってる？」

「……どういう事？」

「Fクラスには姫路瑞希がいる」

そこで周りが再度どよめいた。

確かにAクラスに居るべき姿がない事は納得が出来たが、よもやFクラスに居るだなんて予想は出来なかった。

「姫路がいれば、Fクラスと言えど戦略次第でBクラスを落とす事は十分可能だ。Aクラスと言えど、ぶつかればかなりの損害が出る事は予想できる」

「それがどうしたって言うんだ？」

「準備期間を終えて疲弊した所を、BとCに狙われたらどうする？
ついでの情報だが、Bクラス代表とCクラス代表は付き合ってるぞ？」

姫路瑞希がいる以上は、Aクラスとて並大抵の損害では済まない事は理解できた。

試召戦争は体力も使う為、日頃体力を使わない生徒が多いAクラスにとっては大打撃。

「それにこの戦いだけで、少なくとも1学期は試召戦争とは無縁になる手筈もある」

「……確か？」

「ああ。よっぽどのことがない限りは断言する」

先程の納得できる理由及び、何の迷いもなくハッキリとそう言いきるその姿勢。

翔子はわかったと言わんばかりに頷き、教壇に立つ。

「……FクラスとDクラスの結果が出次第、Bクラスを攻める。皆、準備を始めて」

「さて、手筈は整ったな。後は楽しい楽しいお祭りでも行くか」
「何が楽しい楽しいお祭りよ。成程ね、アンタが大人しくしてる訳だわ」

「ちゃんとクラスの利益も用意したんだから、文句言われる筋合いはない筈だが？」

「確かにアンタの思惑がどうあれ、Aクラスの安泰を行動理由の1つにしてるんなら信頼できるけど」

「なら良いだろ？ 少なくともお前に睨まれてんじゃ迂闊なこと出来ないし、こういう機会がそう何度も来る訳ないんだから」

「……そうね、アタシの目の届かない所で何かされるよりはマシだと思っておくわ。所で光一、Bクラスに攻め込む計画はもう立ててるんでしょ？」

「勿論。後は全員の点数を考慮して部隊編成をしてから修正するだけだ」

「じゃあアンタをAクラスの軍師として代表に推薦しとくから、しっかり働きなさい」

「えー!? ちよつ、待って！ 俺も前線に……」

「ダメよ！ 適材適所、それにアンタは点数に極端すぎるほど偏りがあるんだから、一か所にとどまる方が効率言いに決まってるじゃない」

「そつ、そんな〜!!」

第2問 『Aクラスの内部事情とD対F試験召喚戦争の始まり』

昼休み。

優子は飲み物と軽食を持って、作戦をまとめる光一に歩み寄る

「光一、作戦立案は進んでる？」

「ああ。元々下位クラスから攻めるって視点で考えてたんだから、書き換えなんてすぐ終わる。それに後々の事も考えて全員が試召戦争の感覚がつかめるように配慮もしてあるから、次回につなげられる」

「そう言う所、ぬかりないわね。はいこれ、どうせカロリーメイトだけなんでしょ？」

「おう、サンキュ。確かにAクラスは得点高いけど、試召戦争の観点で見ればただそれだけだからな。いざって時に連携とれなかったり、部隊として機能出来ないなら高得点も意味がないし話にならない」

サンドイッチを一口食べながら、部隊編成を見直す光一。

結局光一をAクラスの軍師にと言う優子の提案は、問題児をそんな大事な立場に置く事などありえないと反対されていたが、先程のBクラス戦提案の姿勢を評価され決定。

それを見て、今へたに評価を落とされ折角の試召戦争を中止にされるよりはと、光一は仕方なく軍師の立場を受け入れた。

「言われてみればそうかもしれないけど、その辺り考慮してるんなら心配ないわね」

「少なくとも存在価値位は誇示してやるさ。Aクラスの安泰に貢献できるようになれば、この先試召戦争を俺から引き起こせることも

可能かもしれない」

「……やっぱりそう言う狙いがあったのね」

「Aクラスの安泰を前提に考えてんだから、それ位見逃してくれても良いだろ？」

実際その通りなだけに、優子としても文句はなかった。

少なくとも前提がそれなら、光一の行動は確実にAクラスの安泰の為になる。

「まったく……そう言う事なら見逃してあげるわ。でもこういう手腕に関しては、素直に尊敬はできるわね。あんたが余所のクラスでなくて良かったと思える位」

「俺としてはFに入って、先鋒を務めたかったんだがな。でも決まった以上どうにもできないんなら、大人しく今やるべき事を最高の形で成し遂げてやるさ」

「光一らしいと言うか、何と言うか……」

光一の慧眼と突発的な事態にも対応できる順応力と手腕は、指揮官としては申し分ない。

しかし光一は好戦的な性格で、こういう事では前に出たがる性質。

優子にしてみれば仕方ないこととはいえ、もっと落ち着きを持って欲しいと思つての配慮なのだが。

……光一は理解はしてても、実行する気はなかった。

「とにかく、クラスの為って言うならしっかり働きなさい。差し入れ位してあげるから」

「わかってるよ。俺だって念願の試召戦争が出来るんだから」

「そう。それじゃ、頼りにしてるんだからしっかりね？」

「女の子の声援ももらえるなんて、男冥利に尽きるね」

少し嬉しそうに、光一は再度パソコンに表示されてる計画を見直し始めた。

優子もその様子を見て満足したのか、自身の席に戻って行く。

Side 優子

まったく、光一ったら。

楽しみにしてたのはわかるけど……

「あの、木下さん？」

「？ どうしたの、佐藤さんに代表」

「……久遠とは、随分親しいみたい」

そこへ代表の霧島翔子さんと、Aクラスの一人である佐藤美穂さんが歩み寄ってきた。

「え？ それはまあ、ね。あいつとは家が隣の幼馴染だから」

「それで……でも不思議です。彼が学園で一番の過激思想の持ち主で、周りから過激派筆頭なんて呼ばれてる問題児だなんて」

「……うん。とてもそんな凶悪な人には見えない」

光一の評判は、学園内では非常に悪い。

常にエアガンやスタンガンを持ち歩き、それらを駆使したケンカでは負け知らず。

おまけに去年は観察処分者の吉井明久君や坂本雄二君と一緒にになり、事あるごとに問題を引き起こしていた問題児なのだから、代表と佐藤さんの言ってる事はよくわかる。

けど光一がそうなった原因は、あの人と光一の驚く位異様に人に嫌われる性質の所為だ。

この学園に来るまでは、アタシも秀吉もアタシ達以外で友達らしい会話をする所どころか、笑いかける所すらも見た事がない。

光一を守ってくれる人なんて誰もいなかったから、自分で何とかするしかなかった結果がああだっただけ。

「トラヤライオンじゃあるまいし、誰かれ噛みつきはしないわよ。

確かに光一は好戦的で嫌いな相手には残忍である事は事実だけど、よっぽどの事がない限りは怒る事も自分からケンカ売る事も滅多にないし、元々アタシと接してる時の顔が本来の光一だからね」

「……それなら特に彼を否定する要素もない。それに私には代表という立場は向かないから、彼みたいな人がいてくれると助かる」

「そうですね。先程の彼の言う事にも一理ありましたし、Fクラスの行動を予期していたと言うのなら頼もしい限りです」

「……何もしなかったアタシにこんな事言う権利はないけど、光一にだって誰からも褒められてしかるべき才能位はある。

そう言う意味では、この試験召喚戦争はまたとない好機かもしれない。

少なくとも姫路さんの事を知って居たとはいえ、光一はFクラスの行動を予期できる慧眼を持ってるとし、頭の回転も速く判断力もあるから、Aクラスの方針を任せるには十分な能力は持っている。

こういう所を認められれば、きっとAクラスで変わる事が出来るかもしれない。

……もしそうなれば、きっと。

「ちょっと待った霧島さん、彼を信用すると言うのか？」

そこへ割り込んできたのは、学年次席の久保利光君。
彼は異様に光一を嫌っていて、光一を軍師にという提案の反対派の
中心人物。

その彼からしてみれば、確かに代表がさっき言った事は聞き捨てな
らないかも知れない。

「……彼の提案に否定できる部分はない筈」

「Bクラスを攻める事に意味がある事に否定はしないが、試験召喚
戦争をしたいが為にクラスをひっかきまわしている可能性がある以
上、僕は彼を信用する訳にはいかない」

確かに光一がこの学園に来た目的は試召戦争だけど、そこまで言う
事はないと思う。

「それは心配いらぬわ久保君、アタシがきつちり監視するから」

「それでもだよ。彼の考えは木下さんにも及ばないのだろう？ A
クラスの安泰という目的の影に、何か隠してる可能性は十分あるん
じゃないか？」

光一の考えはアタシにも及ばない事は事実だから、久保君の言葉は
否定できない。

「否定はしない、そう言えば良いのか？」

ふと見た先で、光一が空になったカップを手に立っていた。

多分飲み物のお代わりでもとりに行くところだったのだろう。

「否定はしないだと？」

「Aクラスの安泰が目的ではあるけど、俺も試召戦争を楽しみたいって目的もある」

「……随分と堂々と言ったな？」

「そりゃあな。知られて困る事でもないし、俺は相互利益を提示したんだから否定される筋合いはない筈だ」

Fクラスの目的が光一の言う通りなら、確かにBクラス戦は光一は試験召喚戦争が出来てAクラスも安泰につながると言う、相互利益につながる。

それを言われては何も言えない以上、久保君は苦虫をかみつぶした顔になる。

「……良いか久遠光一、Aクラスで好き勝手出来ると思うな」

「優子がいる限り無理だつての」

「僕は決して、君の事を認めない……絶対にだ！」

そう言っただけに戻って行く久保君を見送って、光一はさも何もなかったようにフリードリンクサーバーへと歩いて行く。

「……前途多難」

「かもしれないわね」

ふと、久保君に関しての妙な噂を思い出した。

確か光一は、あの問題児の中では特に吉井君と仲が良かった筈……。

「？　どうかしたんですか、木下さん？」

「……ううん、何も」

……出来れば、Aクラス崩壊の火種になりませんように。

時は過ぎ、Dクラス対Fクラスの試召戦争開始
高橋女史が駆り出されてる為自習となり、のんびりコーヒー飲みながらの時間となった。

外では試験召喚戦争が行われていて、怒号が響き渡っている。

「光一、アンタどう見てるの？」

「そうだな……現時点じゃ姫路はテストを受けなきゃ戦力にはならないから、Fクラスは長期戦に持ち込むって所じゃないか？」

「じゃあ回復試験の採点には田中先生が呼ばれてるって所ね。採点は遅いけど点数の付け方が甘いから、長期戦じゃ都合がいいわ」

「その代わりDクラスは戦線を拡大して、早期決着を狙うだろうな。五十嵐教諭と布施教諭が通りがかった辺り、間違いはないだろ。したら採点は木内教諭として、多分次々教師を呼んで戦線を広める筈だから……」

「本当にすごいね、そこまで読めるだなんて」

そこへショートカットのボーイッシュな雰囲気少女が、話しに割り込んできた。

「？ 誰？」

「あつ、一年の終わりに転入して来た工藤愛子です。よろしくね」

「工藤？ …… ああ、あんたが」

点数確認時に見た名前で、印象に残ってたからあっさりとして来た。何せ保健体育で400点オーバー……是非会ってみたいと思っただのだから。

「それにしてもすごいよね、いきなり試験召喚戦争仕掛けるなんて」
「楽しまないの！ 大体努力もしてないのに設備あげようだなんて、間違ってる」

「単純に点数の上下で決めるんだったら、振り分け試験を学年末だけじゃなくて中間期末とかねてやるべきじゃないのか？ なにも試験召喚システムなんて使わなくても」

「……それは、そうかもしれないけど」

「それに勝算もなしに挑んだ所で、設備のランク下げに行くようなもんだぞ？ 一々噛みつく必要も……」

ピンポンパーンパーン！

『連絡いたします。船越先生、船越先生』

「おっ、どうやら手をつつたみたいだな」

「何で放送？」

「捕まえやすくするためだろうな」

『久遠光一君が体育館裏で待っています』

ピキッ……

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

周囲が俺から距離を取り始めていたが、そんな事はどうでもいい。船越教諭と言えば婚期のがして、ついに単位を盾に生徒に交際を迫る様になったという。

そんな相手に俺を売るとは……いい度胸じゃないかFクラス。

「……えーつと、光ー」

「すまん、ちよつとトイレ」

「待ちなさい、トイレ行くのに何でスタンガンを10本も持っていくの!？」

さて……一先ず放送室、だな。

「おおつ、見ろ！ 久遠だ……アンタあ男だよ！」

「おおつ、船越先生の彼氏だ」

「よもやそんな趣味が……ひっ！」

バチバチバチバチッ！！

「……ギヤアアアアアッ！！」「……」

さてと……まずは放送室だな。

そう言えばFクラス代表は雄二だって話だし、恐らくあいつの差し金だろう。

……ゴリラの分際で俺を利用しようたあい度胸だ、後悔させてやる。

Side 優子

「……」

「むっ、無理もないわよ？ だって、普通あんな事されたら怒るでしょっ。」

Fクラスの工作の所為で光一が怒って、恐らく放送室にいるFクラ

又生徒を始末しに行ってしまった。

よりも寄つてこのタイミングでだなんて……もうっ！

『ひいっ！ まっ、待て！ これは俺じゃなくて坂本の指示なんだ！ 俺が考えた訳じゃない、悪いのは坂本なんだ！！』

そこで丁度、Fクラス生徒の怯えた声がスピーカーから響いて来た。多分光一が両手にスタンガンを持って、迫ってるのだろう。

……後この人、往生際が悪い上にクラスメイトを売るなんて最低。

『せつせめて命だけは！ どうか慈悲をください凶王様！！』

ブツッ！

そこでスピーカーの音が途切れた。

……多分光一が今頃制裁してるのだろう。

それにしても、凶王なんて懐かしい呼び名を知ってたのね。

ピンポンパーンポーン

『船越先生、船越先生。先程の放送についてお知らせします』

あっ、今度は光一の声だ。

『坂本雄二君がFクラスで、男女の契りを交わしたいと伝えてほしいと言われたので、お伝えします。左の薬指をきれいにして、是非とも向かってあげてください』

……まあ、仕方ないわよね。

『光—いいいいいいいいいい!!!!』

旧校舎から怒鳴り声が聞こえて来たけど、多分坂本君だ。

けど余所のクラスの人間を利用したのだから、同情の余地なんてある訳もない、

ガラッ!

「ふうっ」

そこへスツキリした雰囲気的光—が戻ってきた。

そう言えば光—は坂本君とは犬猿の仲で、事あることに衝突してると秀吉が行ってたっけ?

坂本君と良い光—と良い、もしFクラスとぶつかったらどうなるんだろ?

第3問 『Fクラスの事情と戦争の終わりとはじまり』

「んで、話って？」

「うん、この教室についてなんだけど……」

時をさかのぼって、初日のFクラス教室前の廊下にて。

「想像以上に酷いもんだな」

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、試召戦争をやってみない？ しかもA……じゃなくて、Bクラス相手に」

「？ ……何が目的だ？」

いきなりの提案に、雄二の目が細くなる。

明久もそれを見て、隠しても無駄だと悟り全てを白状する事に。

「えーっと……姫路さんの事だよ。僕や雄二みたいに実力でFクラスに振り分けられたんだつたらわかるけど、体調管理を怠ったからって言う理由で姫路さんがいきなりFクラス行きはあんまりだと思うんだ」

「……言い分はよくわかった。まあお前に言われるまでもなく、俺自身も試召戦争をやるうと思っていた所だ。Bクラス程度じゃなく、Aクラス相手にな」

「え？ どうして？ 雄二は全然勉強や設備に興味ないよね？」

「世の中学力だけがすべてじゃないって、そんな証明を試してみたくてな。それに……」

そこで言葉を切って、腸が煮えくりかえるかのように怒りのオーラを身にまとう雄二。

明久はふと、秀吉から聞いたある事を思い出す。

秀吉と光一は兄弟分である事は有名な話なので、秀吉は鉄人から光一がどのクラス所属になったかは聞いていた。

「光一に今までのリベンジしてやりたいってのもあるからな」

「あ……雄二は光一に散々やり込められてたからね。けどAクラスに光一がいるんじゃ、余計に難易度が高くない？ 僕としては姫路さんに良い環境で勉強してほしいってだけなんだから、ここは無難に……」

「断る。あの野郎の目的も試験召喚戦争である以上、Aクラスで何かしらの動きを見せる可能性は高い。俺にしてみればあの野郎へのリベンジ、学力だけが全てじゃない事の証明……カモがネギをしょってこの状況、おいし過ぎる！」

「……カモじゃなくて狩人、ネギじゃなくて銃だよ、光一の場合」
一抹の不安を抱えながら、Fクラスに戻って行く明久。

何かと気にかけてくれた親友と戦う事になるかもしれない……その躊躇いと共に。

そして、試験召喚戦争。

「須川君、偽情報を流してほしいんだ。時間を稼ぐために」

「偽情報？ それは構わないけど、すぐにばれるんじゃないか？ Dクラスの前線指揮取ってる塚本は声大きいから、上手く行ってもあつという間に混乱を納められてしまうぞ？」

「大丈夫、対象はDクラスじゃないから」

明久は中堅隊長として、前線意地の為に奮闘していた。

その際此方の狙いを気付かれ、向こうは早期決着を狙い始めた所で、

明久の提案。
それは偽情報をばらまく事。

「大丈夫、対象はDクラスじゃないから
「と言つと?」

「先生たちに流すんだよ。他の場所に向かつてくれる様に」
「成程、それは確かに効果的だ。流す偽情報の内容は任せてくれ、
確実に騙して見せよう」

そう言つて、須川は教室へと戻つていった。
その教室にて。

「坂本！ 吉井隊長から伝令、偽情報で教師を別の場所におびき
出してほしいそうだ」

「ふむつ、そうだな……確か木内教諭が呼ばれてたはずだから、船
越教諭あたりだな。なら明久が体育館裏で……いや、待てよ?」

ふと雄二が、時計をみて考える。
今は授業時間であり、余所のクラスでは授業が行われている。
なら今身動きが取れない人間を生贄にするのが打倒……となると

「よし、久遠光一が体育館裏で待っている。教師と生徒の垣根を越
えた話があるとしても流してくれ」

「へつ? ……あの、坂本?」
「大丈夫だ、今何時だと思つている? 授業時間なんだから、抜け
出す前に逃げ出せば何の問題もない」

「そつ、そうか? ……わかつた」

須川は少々戸惑いながらも、教室を去つて行つた。
雄二はにやりと笑みを浮かべ、スピーカーに目をやる。

ピンポンピンポン！

『連絡いたします、船越先生、船越先生。久遠光一君が体育館裏で待っています、生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

「ぷっ……あははははっ！ 良くやった須川！」

「……坂本君、幾ら何でも」

「何を言ってる姫路、これはクラスの為だ。Fクラスに被害が及ばず訳にはいかないんだから、これは致し方ない事なんだ」

言葉とは裏腹に、楽しそう勝つすっきりした顔で雄二は瑞希にそう言い放った。

そこで……

『ひいっ！ まっ、待て！ これは俺じゃなくて坂本の指示なんだ！ 俺が考えた訳じゃない、悪いのは坂本なんだ！！』

「なっ！？ まさか、もうたどり着いたのか！？」

「そう言えば高橋先生が総合科目で呼び出されていますから、Aクラスは自習かもしれませんね」

「なっ！？」

『せっ、せめて命だけは！ どうか慈悲をください凶王様！！』

ブツッ！

スピーカーがきれる音が響くと同時に、校舎全体を静寂が支配した。

ピンポンピンポン！

『船越先生、船越先生、先程の放送についてお知らせします。坂本雄二君がFクラスで、男女の契りをマジ輪したいと伝えてほしいと言われたので、お伝えします』

ピキッ！

『左手の薬指をきれいにして、是非とも向かってあげてください』
そこでスピーカーのきれいな音が響く。

「光ーイiiiiiiiiiiiiっ！！！！」

そこへ何かダツシュで向かってくるような足音。
雄二がそれを察知し、咄嗟に窓から脱出した

「あの野郎、絶対ぶっ殺してやる！！！」

一方、前線にて。

「よし、皆！ 雄二の死を無駄にするな！ Fクラスの勝利を雄二の墓に報告するんだ！！！」

「！！！！うおおおおおっ！！！！！！」

前線の指揮を執る明久が、それを利用して激励を飛ばした。
Fクラスの士気は向上し、Dクラスもそれに怯む。

「よう明久、がんばってるな」

「あつ、光一」

そこで須川を始末した帰りの光一が通りかかった。

「大丈夫か？ 雄二のバカに酷い目合ってないか？」

「うん、一応ね……」

「そうか。秀吉は？」

「今は補充テストの筈だよ？」

「……頑張れよ吉井明久。どうせAクラス狙ってるんだろ？ ならこんな所で躓くな」

ポンポンと肩を叩いて、Aクラスに去って行った光一。

クラスは変わってもやっぱり友達なんだと、また迷いを持ち始める明久。

「大丈夫かの？ 明久！」

「あつ、秀吉」

「んむつ？ 今のは光一か？ ……成程、お主も同じ気持ちか？」

「うん……光一はきつと怒らないだろうけど、やっぱり僕には」

「明久よ、迷いを持って立ち向かえばきつと光一は怒るのじゃ。もしぶつかるのなら」

「……大丈夫、その時までには覚悟決めるから。だから今は」

「Dクラスを倒そう（すのじゃ）！」

そして放課後。

Dクラス代表が姫路瑞希に打ち取られ、戦争終了

「光一、Dクラスが敗れたわよ？」

「驚く事でもねえよ。さて、それじゃ……」

と言って、光一は荷物をまとめ帰り始める。

「おいコラ！　せめておろしていけ！！」

「ん？　わかった」

「ちよつと待て、何で鋏を取り出す！？　そんなことしたら……」

プツッ！　ガンツッ！　バタバタバタッ！！

「じゃあな」

「テメ、待て光一！！」

そして次の日。

「光一のヤロウ……」

「その様子じゃ、また光一にあしらわれたんだね？」

「まあいいさ。いずれこの設備に押し込めれば良いんだ、そのためにも今は対Bクラス戦に向けて……」

「……緊急事態」

「？　どうした、ムツツリーニ？」

「……… AクラスがBクラスに宣戦布告をした」

「何だと！？　……まさか、光一のヤロウに意図を読まれたのか！
？」

「坂本雄二、お前は目の付けどころも采配も悪くないが、決断が早過ぎるんだ。それじゃ俺の目を欺く事も先手を打つ事も出来ねえよ」

第4問 『暗躍と分裂と利用し利用されの試召戦争』

「おやおや、今年は一体どうなってるんだい？ まさか一学期の初っ端から試召戦争やるうってクラスがもう1つ出るなんて。しかもそれがAクラスとは」

「久遠君の提案だそうですね。Fクラスの狙いは、次はおそらくBクラスだからと」

「あの過激派筆頭と呼ばれてるガキがかい？」

「FクラスがDクラスに攻める事を、事前に察知していた様子だったと」

「真の意図はどこにあるのやら？ ……このガキが一体何をAクラスにもたらすのか、見せて貰おうかね」

「まさかAクラスが宣戦布告とはね……」

「大丈夫なの恭二？ いきなりAクラスと戦うなんて」

「なあに、Aクラスといえどやりようはある。それにあいつがAクラスに居る事で、何やら不穏な状態らしいからな」

「あいつって、過激派筆頭？」

「ああ。聞いた話じゃ、アイツ俺と僅差でAクラスに所属したらしいからな……丁度良い機会だ。Aクラスに入るのはあいつじゃなく俺だつて事の証明になる」

「恭二……」

「そうだ、この戦いが終わったら祝勝会をする。友香も来てくれ」
「うん」

「……一学期早々Aクラス相手の下剋上達成つても悪くねえな。こればかりは、アイツに感謝してやっても良いか」

「どっ、どうしたの雄二!？」

「あの野郎、俺の狙いを読みやがった…… Bクラスを利用して、Aクラスに俺たちに有利な勝負方法を呑ませる作戦を！」

「ええっ!? じゃあ、雄二の作戦は……」

「……こうしちゃいられねえ。あいつの事だ、これが終われば絶対Dクラスに手を伸ばす筈だ。明久、すぐCクラスに宣戦布告して来い！」

「やだよ、雄二が行けば……」

「今はそれどころじゃねえ! 光一は木下優子に目を付けられてる以上、Aクラスの安泰を前提に行動してる筈だ。となると狙いは恐らく、余所のクラスの鎮圧がメインになる筈…… そうなればAクラス攻略はおしまいだ！」

「だからBクラスにとどめようって言ってるじゃないか！」

「テメエ! …… ちっ、もういい。こんな所でバカの手相手してる場合じゃねえんだ」

「やはり何から何まで不利の一点張りじゃの」

「…… やっぱりAクラスが動くと大事か。そしてFクラスは狙い通りCクラスにっ」と

廊下を1人で目立たない様に出歩きながら、光一は余所のクラスを観察していた。

DとFクラスの試召戦争が終わってすぐ、という意図はここにあった。

Fクラスが勝利の勢いという出鼻をくじき、Cクラスの足止めとして利用する為。

そしてCとFの試召戦争の間に、Bクラスを利用してFクラスの作

戦を阻止する為に

「……雄二との采配勝負つても楽しそうではあるんだが、Aクラスの安泰を目的にしなきゃAクラスじゃ何も出来ないからなあ。優子騙すと後が怖いし」

Aクラスの安泰としては、まず力を誇示する事。
下剋上を狙う上では、まず目立たない様に事を進める慎重さが必要となる。

だが必要以上に力を誇示すれば、対策練られてしまう。

「まあそれは後で良いか……さて、そろそろかな？」

「よう久遠、何やってるんだこんな所で？」

声をかけられたさきには、Bクラス代表根本恭二。

光一は極力表情に気を付けながら、フレンドリーにあいさつを交わす事を選択。

「根本か。相変わらず腐った毒キノコみたいな頭で何よりで」

「誰が腐った毒キノコだ!？」

「あつ、すまん。つい軽くけなしちまった」

「もつとひどい表現があるのか!？ ……まあいい。お前こんな所でなにしてる？」

「何って、Aクラス宣戦布告で動揺してる他のクラスの高みの見物だ。結構面白いもんだな、ははっ」

根本は光一をいぶかしげに見るが、杞憂だと結論付けた。
ちなみに光一は秀吉でもなければ表情から真意を読み取れない頬、ポーカーフェイスに長けている。

「しかし驚いたぞ？ まさかAクラスが宣戦布告だなんて」
「折角のシステム何だから、使わないでどうするんだよ？」
「へえっ、随分と柔軟な思考をお持ちの様だな？」

会話を進めつつ、光一は周りに気をはりめぐらせていた。
そこである物を確認すると、少し口元をゆがめる。

「で、用件はそれだけか根本？」

「ああっ、ちよっと通りがかった処を見ただけだからな。じゃあまた、試召戦争で」

「お手柔らかに」

根本と別れ、光一はそのまま振り返りもせず去って行った。

「……写真は撮ったな？」

「ああっ。ばつちりだ」

「ふんっ、バカが。たった1人で出歩くなんて、罨にはめてくださ
いって言ってる様なもんじゃねえか」

「……さて、後は待つか」

試験召喚戦争、1時間前

「……今からBクラス戦の作戦を説明する」

「ちよっと待ってくれ、代表。久遠光一、君に聞きたい事がある」
「なんだ？」

眼鏡を直しながら、光一に敵意を向ける久保がある物突き付けた。

それは一枚の写真で、光一と根本が何か会話をしている場面。

「これはどういう事だ？」

「何って、さつき会ったから世間話したんだけど？」

「相手はBクラス代表の根本君じゃないか。相手が相手だけに、それだけで信用する訳にはいかないな」

久保の言うとおり、話し相手がBクラス代表で卑怯な事で有名な根本となれば、話は別。

その事が波紋を呼び、半数以上がドヨドヨと批判の声をあげ始める。

「もしかして、試験召喚戦争を長引かせる為の取引か何かか？」

「ありえるぞそれ。久遠の目的が試験召喚戦争そのものなら」

「ちよつと、だとしたら私達久遠君にはめられたって事？」

「冗談じゃないわ、あんな人の手ゴマ扱いにされてただなんて！」

「だから嫌なのよ！ こんな悪党をAクラスどころか、重要な立場におくだなんて!!！」

「そうだ！ 久遠を外せ！」

Aクラスにブーイングが響くと、優子はそれに反論しようと思っただけで、光一に止められた。

光一が目配せで察した優子は、そのまま大人しく引き下がる。

「わかった。という訳で代表、軍師は新しく選別し直してくれ」

「？ 思ったよりもあっさりと引き下がるな？」

「俺が何か言っただけで意見変える気ないんだろ？ ならくだらない事聞くな」

久保は疑念に思いつつも、既に始まりそうな試験戦争を意識を向けた。

光一はさっさと輪から離れて、自身の席に戻る。

「ちよつと光一！」

「まずは落ち着けよ。優先すべきはどっちだ？」

「っ！……そうね」

光一が優子を宥めると、リクライニングシートにどっかと座りのんびりと傍観し始める。

そこで輪を抜けて、翔子がこちらへ。

「よう、霧島代表閣下」

「……それはやめて。私は成績だけでなったただだから」

「それでもなつたんなら胸を張れ。あんたが大将なんだ、堂々としてないでどうする？」

「……わかった。そしてごめんなさい」

「気にすんなよ。あんたが悪い訳じゃない」

「……あなたが悪い人とはとても思えない」

翔子のその言葉に、光一は驚いた様に見開いた。

「悪い人に見えない？……俺が？」

「……？何か、変な事言った？」

「あつ、いや……それより霧島、代表だったらあつちをいないと」

「……わかった」

光一がこつそり手渡した一枚の紙をポケットにしまい、翔子は作戦会議へと戻って行った。

「アンタの狙い、そろそろ話してくれない？」

「ん？ ああつ、そうだな」

「それボクにも教えてくれない？」

今度は工藤愛子が、話に割り込んできた。

「？ どうしたんだ工藤、向こう行かなくていいのか？」

「向こうよりこっちの方が面白そうだからね。試召戦争が目当ての久遠君があっさり引き下がったのも気になるし」

「へえっ、随分と柔らかい頭の持ち主だ事で」

光一は少し驚いたように目を見開きながら、そう言った。

「という訳で、よろしく」

「あっ、ああっ。よろしく頼む」

「で、どう出るつもり？」

「？ 優子もこっちか？」

「これがアンタのシナリオなら、解決策位あるんでしょ？ なら迷う必要ないわ」

優子の言葉にも、再度驚いた様に眼を見開いた。

「だったらちよっと待ってくれ。策を考え直さない」と

「……アンタ1人でやる気だったの？」

「これ位いつもの事だろ？ 今更誰かに信用されるなんて思えるほど、俺の頭はめでたい作りしてねえの」

「せめてアタシ位信用しなさいよ」

「信用はしてるさ。優等生の立場に関わらない事柄ではな」

光一の言葉に、優子は顔をそらした。

一応信頼はしてても、優等生と問題児関連では信用という概念自体ない。

「工藤さん、あなたはそれだけでコッチでいいの？」
「あっ、愛子でいいよ？ なんだか面白そうだからね」
「？ アタシも優子でいいわ。それで、面白そうって言うのは？」
「だって初日からAクラスで試召戦争起こそうなんて人、普通居ないでしょ？ それにFクラスの動きを読んだ事といい、興味持ったからじゃダメかな？」

優子は少し動揺した。

「興味って……光一に？」
「うん、そうだけど？ さっきも言ったけど、初日から試召戦争を起こそうとしたり、Fクラスの動き読んでたち、すごい人じゃない？ もしかしたら仲良くすれば面白くなってる」
「……そつ、そう。まあ、光一も愛子みたいな人が増えたら、少しは行動改めてくれるかもしれないし、アタシは歓迎よ」

そして午後1時。

「開戦だ、全員準備は良いかい！？」
「……おーっ！」「」「」

久保が教壇に立ち、号令をあげる。
結局学年次席と信用できる久保が軍師の立場につき、彼の士氣の元で進められることとなった。

「木下さん、悪いが見張りを頼めるかい？」
「今回ばかりはあまり賛同する気にはなれないけど、わかったわ」

アイマスクをつけ、すやすやと寝息を立てる光一をみて、優子は久保の言葉に一応賛同の意を見せる。

「久保君、前線部隊が交戦に入ったわ！」
「わかった」

久保が教室の戸に立ち、指揮を飛ばし始める。
そこで光一がアイマスクをとり、その様子を見据え始めた。

「で、光一はどんな考え？」

「久保は力押しで行く気だろうが、久保と根本じゃ駆け引きにおいては根本の方が上……猛牛の群れを対処するには、時間さえあればその規模くらの落とし穴掘れば十分だ」

「……じゃあアンタが午後に指定したのは」
「そう言う事。まあ心配はいらんだろ、工藤に高橋女史を確保するよう頼んだから、総合科目でぶつかる事はない」

学年順位がそのまま出る総合科目は、上位クラスにとっては有利な武器となる。

その分単科目の点数が減るだけに、リスクはあるが。

「うわっ！ 伏兵だ!？」

「すぐ援護に回れ！」

「ダメだ、遮られた！ 科目が古典に変えられた!!」

「? 何か、戦線に動きが見えたみたいよ？」

「まずは好調と見せかけておいて、大体の所で伏兵の投入。その動揺について、自分達に有利なフィールドに持ち込む……となると動揺で統率が乱れた以上、根本はここで一気に押し切る筈」

冷静に事を見る光一の眼前では、押し切られた前線の一部がAクラスの教室になだれ込んできた。

動揺で冷静さを欠いたAクラスに対し、Bは落ち着いて連携を獲り1人ずつ落としていく。

「右入り口占拠した！ ここで一気に攻めるぞ！」

「消耗した者は回復試験を受ける、後は中堅部隊が受け持つ！！」

「押し切られたわよ？」

「そりゃあな。予想外のかく乱は真面目な奴には有効な手段だから、今の冷静さを欠いた状態でどうにかできる訳ない」

占拠された右入口に集結し、そこから徐々になだれ込んで来る。

「よし、良い調子だ。近衛部隊も参戦するぞ！」

そこに響くのはBクラス代表の根本恭二の声。

「おつ、来たか」

「よう久遠、そんな所でのんびり昼寝とは、良い御身分じゃねえか」

「ふああっ……」

「ふんっ、まあせいぜいそこで見物してる。俺とお前、どちらがAクラスに入るべきだったか、ここで思い知らせてやる！」

近衛部隊がかこう翔子を狙い、Bクラス中堅部隊が一気に突破を狙う用に突進。

そこで光一がすつくと立ち上がり、ポケットからベアリングを一個取り出す。

「さて、そろそろだな……よっと」

ピシッ！ （光一がベアリングの指弾を撃つ音）

パスッ！ （ベアリングが竹中教諭の頭に当たる音）

パサッ！ （竹中教諭のヅラが落ちる音）

教室内の空気が凍った。

「……………はうっ！？　しよっ、少々急用を思い出しましたので！」

ヅラを慌てて拾い、逃げるように教室から去って行く竹中教諭。
古典のフィールドが消え、根本が指示を飛ばし現代文の教師を呼ばうと……………。

「お待ちせ！　先生、召喚許可を！」

「はっ、はい。物理勝負、承認します！」

した所で、愛子が物理の木村教諭を連れて戻ってきた。

「……………久遠、優子、お願い！」

「了解。優子、近衛部隊頼む。サモン！」

「わかったわ、サモン！」

「ボクも手伝う！」

『Aクラス　久遠光一　物理687点』

VS

『Bクラス　中堅部隊　物理平均148点』

『Aクラス　木下優子&工藤愛子　物理378点&287点』

V S

『Bクラス 近衛部隊 物理平均211点』

「調子に乗る様じゃまだまだ2流だ、根本」

黒一色で統一されたごついコートを纏い、黒いスラックスにブーツ。手にセミオートライフルとリボルバー拳銃を握り、腰に巻いたベルトには自動拳銃と剣が一本ずつ。

という装備の、光一の召喚獣が中堅部隊12名にライフルを撃ちだす。

「バカが、そんな人数相手に……」

「“爆発”！」

「え？」

ライフルの銃弾が集団のほぼ中心に到達すると同時に、光一がキーワードを叫ぶ。

弾丸が反応するかのように光輝き、周囲の召喚獣を呑みこむ大爆発を起こした。

「なっ!?!」

「優子、工藤、そいつらの足止め、もしくは駆除は任せた」

「任せてよ」

「ビシッと決めなさいよ、光一！」

愛子と優子が近衛部隊と交戦し、周囲のAクラスも優子達に続く様に参戦。

光一が一步、根本に向かって踏み出す。

「ひっ!」

「さて…… Aクラス久遠光一、Bクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」

「うっ、うわああああっ!!!」

『Aクラス 久遠光一 物理634点』

VS

『Bクラス 根本恭二 物理214点』

破れかぶれに突進する根本に対し、光一の召喚獣はまずリボルバーを手に根本の召喚獣の足を撃ち抜いた。

バランスを崩した所を見計らい、突進して剣を抜き根本の召喚獣が武器を持つ手を切り落とし、リボルバーを落としベルトからライフルを抜いて、その頭を撃ち抜いた。

「Mission complete! …… 試召戦争終了だ」

Aクラス対Bクラス試験召喚戦争終結、Aクラスの勝利。

第5問 『最弱と最強の戦争の始まり』

「……つまり僕は、根本君に利用されていたところか、久遠光一の思惑通りに動いたにすぎないと、そう言うのか？」

「そう言う事よ。この場に居る全員ね……でも、これでわかったでしょ？ 光一をアタシが軍師に推挙した理由」

「くっ……」

戦争が終わり、戦後対談。

光一が翔子と共に、力無く座りこんで居る根本に歩み寄る傍らでの久保と優子のやり取り。

久保が忌々しげに光一を睨みつけるのを無視して、光一は周りを見回し……

「悪いが、対談は3人で行いたい。全員教室から出てくれないか？」

「なっ！ 君はまた！！」

「……お願い」

「くっ……」

代表の言葉には逆らえず、久保は苦虫をかみつぶした顔で外へ。他のメンバーも従い、外へと出て行った。

「ねえ優子、久遠君達何を離しててるのかな？」

「さあ？ 光一の思惑、時々アタシも読めないから。でも代表だつて光一が無茶な事提案したら止めるわよ」

「そう？ 確か久遠君つて、過激派筆頭なんて呼ばれてるんだよね？ もしかしたら脅したり……」

「それはないわよ。アイツはよっぽどの事がない限り、自分から攻撃したりはしないもの。光一の悪評だつてその実、殆どアイツ自身

に何の責任はないから」

一体何を話しているか、という話題から何でもない話題まで。Aクラス教室前で、色々と予想が連ねられる中で、数分後。

「設備の入れ替えは明日だ。これにて試験召喚戦争終了」

「それだけ……なの？」

「ああ、それだけだ。元々Bクラスを無力化させることが目的なんだから、なあ？」

「……うん、それだけ」

「ちっ……ああっ、それだけだよ」

Aクラスのメンバーは全員釈然とはしないものの、光一の手の上で踊って居たにすぎない為にも言えずにいた。

「……久遠、これだけでいいの？」

「ああっ。後はFクラスの勝利報告を待つだけだ」

その頃、Fクラス教室にて。

「……… Aクラスが勝った。入れ替えは明日らしい」

「やはりか……皆、急ぐぞ！ この戦争、今日中に終わらせる！！」

Cクラスが力押しで来るのに対して、Fクラスは数学フィールドでの瑞希と美波のツートップによるパワーゲーム。

姫路瑞希は言わずもがな、島田美波は数学だけならBクラス級の成績を誇る2人をトップに、討ち漏らしを連携に手葬る。

「……しかし、何かが引つ掛かるな。光一がすんなりBクラスを見

逃すだなんて」

「坂本、近藤の部隊が補給に戻った」

「ん？ ああつ、じゃあ次は武藤の部隊を出せ！ 島田の点数が危なくなつたらすぐに科目を変更、補充試験を受けさせるんだ！」

ムツツリー二の報告を受けて、雄二は疑問に思う。

Aクラスから見てもBクラスには利用価値はあると言うのに、光一がそれをすんなり手放した事に。

地盤を固めるにしても利用するにしても、学年2位のクラスともなればそれらの価値は非常に高い。

「……一体何の意図があるんだ？」

「……………調べる？」

「いや、もう良い。今はとにかく、Cクラスを早急に撃破するんだ。お前も準備しろ、ムツツリー二」

「……………了解」

雄二は頭を切り替え、Cクラス戦に専念する事にした。

いかなる意図があれど、Bクラス戦で多少の負担はあった筈であり、この機を逃す手もない。

となれば、当初予定してたBクラスとDクラスを利用して……………という要求もやりやすくなる。

「見てやがれ光一。俺の意図を見透かした気でいやがるんだろうが、俺を舐めた時点でそれが悪手だつて事を教えてやる」

その日、パワー勝負でCクラス教室まで押し込む事に成功し、点数不足で一旦退避を狙った代表をムツツリー二に討たれ戦争は終結。その結果は当然和平交渉という形で終わり、FクラスはCクラスと

いう交渉の手札を手に入れた。

その次の日。

「まずは皆に礼を言いたい。計画に誤差が生じたとはいえ、周りの連中には不可能と言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「ゆっ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああっ、自分でもそう思う。だがこれは、偽らざる俺の気持ちだ……ここまでできた以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもにつき付けるんだ!!」

まずはFクラス。

Fクラス代表雄二が教壇に立ち、今日行われる対Aクラス試験召喚戦争に向けて最後のミーティング。

その士気をあげるべく演説で、Fクラスは沸いた。

「おおーっ!!」

「そうだーっ!!」

「勉強だけじゃないんだーっ!!」

一方、Aクラスにて。

「光一の狙い通りなら、Fクラスが仕掛けるとしたら今日だけど…

…」

「………本当に来るの?」

「今更久遠君を疑う要素はないから、信じるけど」
「来るさ。でなきゃ、Bクラスを攻めた意味の1つがなくなる」

光一のシステムデスクを中心に愛子と優子、翔子の3人との会話。
チヨコレートをかじりながら、光一は今か今かとFクラスの来訪を待っていた。

「Bクラスを攻めた理由？」

「そう。まずは最初に言った通り、他のクラスの足掛かりを抑えること。それとある条件下でBクラスにはやって貰う事があるんでね。それさえ済めばCとDが抑えられてる今、しばらく平和にはなる」

「……？ 久遠は確か、試召戦争がこの学園に来た目的の筈」

「そうだけど、別にただ戦争がやりたいってだけじゃないよ。弱い者いじめの趣味はないし、面白くない」

「もしかして、久遠君って強い相手と戦う事に快感感じる戦闘狂とか？」

愛子のその言葉に、光一は笑顔を浮かべて肯定するように頷く。

「モヤシのくせに性格だけは攻撃的なんだから」

「体格と性格は関係ないだろ！ まあだからこそ、BとF以外となんて時間の無駄だからな」

「？ Bはともかく、どうしてFまで？」

「雄二が代表だからってのもあるけど、あそこは特異な能力を持った奴が多いからな。使い方次第じゃ、Aクラス以上の戦力になる奴が多いから……さて、仕掛けるならそろそろだな。工藤、頼みがある」

「いいよ、何すればいいの？」

光一がごにょごにょと耳打ちして、愛子が驚いた顔になる。

それに構わず耳打ちを続けると……

「はい、じゃあFクラスが来たらそれを伝えに行けばいいんだね？」

「ああっ、頼む」

光一がそう言つてすぐ、Aクラスの戸が開く。

そこにはFクラス代表坂本雄二をはじめとする、Fクラスの主力陣。

それを見た光一は愛子に目配せをし頷くのを見てから、雄二達の元へ。

「よう雄二、待ってたぜ」

「ああっ、来てやったぞ」

「……さて、堅苦しい挨拶は抜きにして、用件を聞こうか？」

「ならば……FクラスはAクラスに試召戦争として、代表同士の一騎打ちを申し込む」

光一は目を細める。

一騎打ちに雄二の狙いがある……となると、如何にそれを回避するか。

「何が目的だ？」

「もちろん、俺達Fクラスの勝利だ」

「なら断る、態々リスクを選ぶ理由もないな」

「賢明だな……だが、お前ならわかつてるだろ？俺達Fクラスが、

何の為に他のクラスを狙い続けて来たか」

「ああっ、当然だろ？今の時期上位を狙うなら、自分達に有利なフィールドに持ち込むのは必要不可欠だ。その為の土台を作るには、他のクラスを利用するよりほかにないからな」

だからこそ、光一はBクラスに攻め入ることを提案した。
雄二は不敵に笑い、光一に余裕ある態度で……

「それを阻止する為にBクラスに攻め入ったんだろ？が、俺としては大助かりだ。Bクラス戦後で疲弊してる今なら、CクラスとDクラス後の俺達という3連戦を断る理由もないだろうからな」

「確かにな……だが、詰めが甘い。Bクラスで俺も一応の信頼は得る事が出来たから、今ならDクラス位疲弊するまでもなく落とす手はずを整えられる」

「はっ？ おいおい、俺達にはCクラスも……」

『BクラスはCクラスに対して、試験召喚戦争を申し込む！』

「なっ!？」

「Cクラスも……どうしたんだ？」

「ちよつと待て！ Bクラスはお前らAクラスに負けただろ？ 設備だってCクラス級に……」

「設備の入れ替えは手間だが、時間はそうかからないからな。だから根本を俺のパシリにする事と此方の指示でCクラスを足止めする事、そして設備のランクダウンは1週間だけって条件で和平交渉を確約させたんだ。まあコレ知ってるのは、俺と霧島代表と根本だけだな」

完全に欺かれた雄二は、苦虫をかみつぶした顔のまま光一を睨みつける。

「……代表を含めた3人で交渉を進めるから、変だと思ったら」

「内容が漏れたりしたらそれこそ台無しになるからな。まあ隠して悪かったとは思ってるけど」

「くそつ、完全に騙されたって事か!？」

「甘いねえ雄二。目を騙すならこれ位やってのけないと」

雄二が歯軋りする程食い縛るのを、不敵な笑みで光一は見据える。

「で、どうすんだ？ 今ならDクラス使わせる前に攻め入っても構わないし、お前らとしてもBクラスはCクラス戦後を狙えば確実に落とせる。やめるなら……」

「……待つて久遠」

光一の言葉を遮る様に、翔子が割り込んできた。

「？ どうした代表閣下？」

「……久遠の思惑を無駄にして悪いとは思ってるけど、一騎打ちを受けて立ちたい」

「それは別にかまわないけど、どうして？」

「……それは」

言いづらいつわんばかりに翔子が俯くと、光一は疑問符を浮かべる。

それから耳打ちするように手を口元に当てるのを見て、光一はそつと耳を寄せる。

ごによごによと翔子に耳打ちされる光一は、内容を聞いて啞然とした。

「……マジ？」

「……うん。それで、どう？」

「えーっと……まあ構わないぞ？ 代表閣下の御命令とあらば、お望み通りに進めるのが俺の仕事なんだから」

「……………ありがとう」

ポリポリと頭をかいて、信じられんと言わんばかりに雄二を見る。雄二も何を聞いたのか察しがついてた為、光一の態度を気にもかけない。

「一騎打ちは受けて立つ。だが雄二、勝負で負けたらお前には代表と恋人づきあいしてもらって条件があるがな」

「……………え……………」

今度はAクラスおよびFクラスメンバーが啞然とした。

いち早く意識を取り戻した明久が、光一に疑問を投げかける。

「あの、光一？ 今なんて？」

「だから、勝負で負けたら坂本雄二には霧島翔子と恋人づきあいしてもらって事だ。まあお前らが勝ったら、代表閣下は雄二の事は諦めるってよ」

「え？ どういう事？ 霧島さんって確か……………」

「簡単に言えば、軒並み告白を断ってたのは既に雄二を心に決めた人として、女子を気にかけてたのは雄二の近くに居る女子を警戒してたってことだ。多分それが湾曲して同性愛者だって噂になっただけじゃないのか？」

成程、と全員が頷いた。

その渦中である雄二が、呆れる様に口を開く。

「……………お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断つただろ？ 他の奴と……………例えばその光一とでも付き合えば良いじゃないか」

「……久遠は良い人だけど、私には雄二しかない」

「あーっ、話に割り込んで悪いけど、それで受けるのか雄二？」

居心地悪そうに光一が割り込み、その先は終わってからだと言わんばかりに話を切った。

「良いだろう、受けて立つ」

「だけど完全なアウエーでやるつもりはねえぜ？ 勝負方法は一騎打ちじゃなくて5対5で、3回勝った方の勝ち。それと科目指定については3回お前らに選択権をやる、位は呑んで貰うぞ？」

「異論はないな。選択権も問題はない」

「じゃあ開戦はそうだな……10時からだ」

「わかった」

Fクラスのメンバーが去って行くと、翔子が光一に頭を下げた。

「……ありがとう、久遠」

「なあに、代表のご命令とあらば確実に遂行するのが俺の役目だ」

「……だからこそ、ありがとう」

「……っ！ えーっと……さて、作戦会議だ」

戸惑いと照れを混ぜた様な表情で、光一は話を切り教壇へ。

それを見てた優子と愛子は、その様子を見て一言。

「……時々久遠君、代表を信じられない物を見る目で見るね？」

「光一は天性の嫌われ者だからね。あんなふうに信用される事自体が、光一にとっては非常識だから」

「なんだかさ、久遠君って良い人なのに運がない所為で嫌われてるって印象だね？」

「おーい、そこ静かにしてくれ」

翔子を伴った光一が教壇に立ち、周りを見回す。
全員が準備完了であることを確認すると、まずは……

「さて、これからFクラス戦は5対5になる訳だが、まず1つ言う事がある……この勝負、Aクラスは不利だ」

どよどよと動揺の意を示し始める面々。

「ちょっと光一、自分から言い出しといて何言ってるのよ!？」

「雄二のあの態度、どう考えても霧島相手に勝てる確信があるって事だ……覚悟しておいた方がいい」

「ですが、幾ら何でもFクラスに……」

「そういう考えでBクラスに挑んで、どうなったと思ってるんだ？」

それを言われては何も言えなかった。

「けどまあ、どうにか出来ない訳じゃない。向こうの狙いは大かた、ムツツリー二と姫路で3対2の勝利だろ」

「そうかも、ね。姫路さんは言わずもがな、土屋君は保健体育でなら勝てないわ」

「だがそこが甘い。高得点によるバカ力頼みでどうにかできると思う時点でな」

「……じゃあ姫路さんと土屋君の攻略法は、もう確立させてるのね?」

「勿論。それはその時教えるから……その為に工藤、ちょっと」

「ん? はいはい」

「……」

「……？」 優子、どうしたの？ 不機嫌そう」
「っ！？」 そっ、そっ？ 別にそんな事ないけど？」

第6問 『技の光一、力の雄二』

午前10時

Aクラス対Fクラス、決戦の火ぶたが切られた

「……何で秀吉がラウンドガールなんだ？」

「こつというのは秀吉が最適だからだよ」

「ワシはガールではないのじゃ」

ラウンドガールを務める秀吉が、まず第一ラウンドの宣言。

「さて……優子、先鋒頼めるか？」

「アタシが？」

「そう。優子なら全科目ムラがないから、出だしを見るには最適なんだよ」

「わかった、じゃあ行ってくる」

Aクラスからは木下優子

「それじゃ、行ってくる」

そしてFクラスからは、島田美波。
展開されるフィールドは、数学。

「ウチは数学なら、Bクラス並の点数があるんだから」

「島田、確かにそれはすごいが……」

『Fクラス 島田美波 数学189点』

VS

『Aクラス 木下優子 数学343点』

「優子は全科目の平均が300点代なんだから、役不足だ」

サーベルを構えた美波の召喚獣を、優子の召喚獣がスピアで一撃の元に消し去った。

「勝者、Aクラス木下優子」

「まずは一勝……だな。さて、次はどう出た物かな？」

光一がAクラスの点数をまとめたプリントを見ながら、次を考え始めた。

ここで出るとしたら、恐らく勝ち星狙いで姫路か、操作技術に長けて雄二にとっては捨て駒の明久。

しかし姫路対策は確実にする為にも、ここでの出方次第となる。

となると……

「えーっと、佐藤って誰だ？」

「あっ、私です」

姫路瑞希は物理が苦手な筈なので、自分の次位に物理の点数が高い佐藤美穂を出す事に。

明久には悪いと思った物の、ここで上手く行けば……

「よし、頼むぞ明久」

「……やっぱり捨て駒扱いだな」

その後、一撃で葬られ美波に敗北の罰を受ける明久。
雄二がそれに対して、ハッキリと捨て駒扱いだったと宣言した。

「では第3ラウンドを……」

「あつ、一旦中断。霧島、ちよつと」

「？」

少し離れた所に翔子を連れていき、そつと耳打ち。

「……それ位、私に許可を求めなくても」

「そつ言う訳にはいかないだろ。Aクラス代表は霧島翔子であり、
久遠光一じゃないんだから」

「……わかった。じゃあ久遠の言うとおりにして良い」

翔子から許可をもらい、2人は一路戦いの場へと戻る。

「良いですか？ それでは……」

「ここでAクラスはFクラスに降伏勧告をする」

その言葉にFクラスメンバーが激怒し、ブーイングがこだました。

光一はそれにおくする事もなく、雄二と向き合う。

「今なら条件さえ飲めば設備のランクダウンもしないし、和平交渉
で終結という事にしてやる。今ならBクラスを落とす事も容易いだ
ろつし、FクラスからBクラスへのランクアップだって悪くはない
だろ？」

「はっ？ 何言ってるんだお前？ 島田とこんな生ゴミに勝って2
勝した位で、もう勝利者のつもりか？」

「今生ゴミって言ったな!？」

「そつじゃねえよ。お前の狙いはもう読めたから、もうAクラスの

勝利は決まったって言うてんだ。お前と代表の勝負に関しては別だが、お前ご自慢のお2人に何の対抗策も練ってないとも思ってるのか？」

「ハツタリも立派な武器……だったな。モヤシ炒めになった上にFクラス設備に落ちるともなりや、そりやまあ怖じ気づきもするか」

ピキツと空気が凍りつき始めた。

「そんなに俺に負けるのがお気に召したのかな？ それとも霧島と恋人関係になれるのがそんなに嬉しいか？」

「はっ？ 俺に負けたくないからって必死だな」

「必死なのはお前だろうが。今のうちにデート先考えた方がいいんじゃないか？ 仲間に会いに行く事も兼ねての動物園とか」

「お前はスーパードンでも行けば会えるからな。やすっぽいことで」

「安いのはお前だろうが。そうやって感情に流されるから、いつまでたっても負けゴリラから上に上がれないんだよ」

「けっ！ その腐ったモヤシ独特の減らず口も今日限りと思うと、感慨深いねえ」

「君達、試験召喚戦争中ですよ！」

険悪なムードに包まれながらの口げんかは、高橋女史の鶴の一声で終結。

光一と雄二は仕方ないと言わんばかりに、自分の陣営に戻り始める。

「全く……折角の善意を足蹴にした事、後悔させてやるよ。文月ゴリラ坂本雄二」

「へっ、後悔するのはそっちだ。文月モヤシ久遠光一」

互いに捨て台詞を残して。

「ムッツリーニ、出番だ！」

「……………(コク)」

「工藤、勝利報告期待するぞ」

「うん、任せてよ！」

フィールドは保健体育。

Fクラス、Aクラスからそれぞれ最高得点者がフィールドに立つ。

「君、保健体育が得意なんだってね？　ボクも結構得意なんだよ？

君と違って、実技でね」

「え？　マジ!?!」

「あれ、そう言えば言わなかったっけ？　なんなら勉強も兼ねて試してみる？」

「あつ、よろこん……………」

「そう言う相手が一生見込めない癖して何言ってるの!?!」

グサツ!!

「幾ら何でもそこまで言う事ないだろ!?!」

「ほっ、本気で泣く事ないじゃない!?!」

「うるせえな！　良いよもう、女なんか大っきらいだ畜生!?!」

「じゃあ男なら……………」

バチバチバチバチツ!!

「ぎゃあああああああああああああああつ!?!」

「2度とそんな事言えんようにその口縫いつけた後ハンダ付けしてやる!?!」

「やめなさい光一！　アタシが悪かったから!?!」

「……須川君もバカだね。この前あんな目にあつたくせに」
「……うむっ。光一は怒らせるとあらゆる意味で破滅じゃの」

余計な事を言った須川が地獄を見た。

それを見る明久と秀吉は、僕達友達で良かったと思っていたとか。

「……早く始めてください」

「はいっと。サモン」

「……サモン」

そうこうしてる間に、勝負は始まった。

「なっ、なんだあの巨大な斧は！？ 腕輪までしてるし！」

セーラー服に召喚獣の丈を超える斧という装備の愛子の召喚獣。
忍び装束に小太刀のムッツリー二の召喚獣。

『Aクラス 工藤愛子 保健体育446点』

VS

『Fクラス 土屋康太 保健体育572点』

「やっぱり久遠君の言うとおり、点数では負けてるか……でも、ム
ツツリー二君の攻略法は聞いているからね」

「……俺の？」

「そうっ、おかげで鬼に金棒ってね」

「……面白い。“加速”」

ムツツリー二の召喚獣が小太刀を構え、腕輪を起動。

「きた！」

愛子が光一から言われた通り、腕輪の起動と同時に斧をまっすぐに構え突進。

スパンツ！

「……………何！？」

その次の瞬間、愛子の召喚獣の後ろにムツツリーニの召喚獣が姿を現した。

……………胴体が真つ二つになった状態で。

「勝者、Aクラス工藤愛子。よってこの勝負、Aクラスの勝利となります」

立ち会いを務める高橋により宣言が成された。

「……………狙い通り、だな」

「え？ 何？ 何が起こったの！？」

「簡単な話だ。ムツツリーニの腕輪は加速……………それを利用して自爆を誘っただけだ」

「……………物理はお前の得意分野、弱点を見破る事も用意だったって事かよ」

「そう言う事だ。それで、まだやるか？」

ザッ！

「やります」

「姫路？」

「私はFクラスが好きなんです。だからせめて、私が一矢報います」
「Fクラスが好き、ね……よし、次は俺が出る。総合科目フィールドでな」

総合科目、で全員がどよめいた。

総合科目は学年順位がそのまま出るだけに、普通は格下相手に使用する科目。

「まずは始めまして、だな。姫路、Fクラスが好きって言ったな？
その言葉、偽りはないか？」

「はい。だから私も、精一杯頑張りたいんです。サモン！」

「そうかい……サモン！」

豪著な鎧を纏い、身の丈を超えた大剣を持つ瑞希の召喚獣。

全身を黒一色の衣服で、セミオートライフルと剣を手に持ち、ベルトに拳銃2丁という光一の召喚獣

『Aクラス 久遠光一 総合科目2190点』

VS

『Fクラス 姫路瑞希 総合科目4409点』

「その言葉にウソ偽りはなし、か……しかし霧島並だなんて、流石に驚いたな」

「ウソ偽りが無いから、頑張れるんです」

「そうかい……Aクラス軍師久遠光一、その気持ちに敬意を表し、全力にてお相手する」

「はい。Fクラス姫路瑞希、まいります！」

第7問 『過激派の戦いと終戦と始まる物語』

ギインツ！

久遠光一対姫路瑞希。

点数が倍以上差がある戦いで、その場の大半が姫路瑞希の勝利を信じて疑わなかった。

……しかし

『Aクラス 久遠光一 総合科目2109点』

VS

『Fクラス 姫路瑞希 総合科目3138点』

その予想は裏切られ、瑞希は未だに一撃すら叩きこめず。

ただひたすら光一のヒットアンドアウェイに翻弄され、着実に点数を削られていた。

「そんな……どうして？」

「いくらバカ力振るった処で、当たらにや意味なんてねえよ」

「えい！ えい！ えーい！！」

瑞希の召喚獣が大剣をふるい、光一の召喚獣めがけて何度も振り下ろす。

光一の召喚獣は苦も無くかわし、隙を突いて剣で斬ってから距離をとり、リボルバーと自動拳銃での射撃。

「姫路さん！」

「やはり、光一の前では無力なのか！？」

Fクラスにとってのワイルドカードで、勝利のカギともいえる彼女がいつも簡単にあしらわれている。

その光景には、Fクラスメンバーも絶句していた。

「姫路、心意気は買うが、それだけじゃダメだ。まあこればかりは、お前の代表の失態だがな」

「えっ……?」

「姫路には荒事に関する経験なんて一切ない。だから俺から見れば、姫路の召喚獣はただバカ力任せに剣を振るうだけで、動きはどこもかしこも隙だらけなんだよ」

光一の召喚獣が剣を突きだし、瑞希の召喚獣が持っている大剣でガーン。

剣同士がぶつかると同時に、光一の召喚獣が自動拳銃を取り出し瑞希の召喚獣の足を狙って発砲。

瑞希が体勢を崩したと同時に、剣から手を話しライフルを撃ちだす。

「生憎だが姫路、お前じゃ俺にや勝てねえよ」

「何よ偉そうに!!」

Fクラスのギャラリーから、美波をはじめとしたブーイングが場に響いた。

Aクラスでも、やってる事が可憐な少女をいじめる様に見える為、光一に対しては批判的な声が上がりに始める。

ただ、光一に理解を示してる明久と秀吉、そして優子と翔子と愛子は、その様子に戸惑いなんかかなだめようとすると、良い手が思い浮かばず断念。

「……あなたは」

「ん？」

「あなたはどうして、こんな状況で平然としていられるんですか？」
「どうしてって、慣れてるから。ま、世の中には何をしようと好かれる人間もいれば、嫌われる奴もいるってこと……そんじゃ、そろそろ決めだ」

落ちてる剣を拾い、そのまま振り下ろし……

『Fクラス 姫路瑞希 0点』

「勝者、Aクラス久遠光一」

高橋女史の勝ち名乗りにも、その場はなにも声が上がらない。

寧ろ光一に対して、非難や中傷のような視線が集中するのみだった。

光一はそれをさして気にも留めず、雄二に向けて指をさす。

「雄二、お前らしくもねえミス犯しやがったな。姫路やムツツリー
二の力任せで押し切ろうなんて、俺がいる時点で意味がある訳ねえ
だろうが」

「くっ……そうだな。ムツツリー二の能力は知っていて、姫路だっ
てケンカとかの荒事に経験なんてない。お前がそれに気付いて弱点
を突く事位、予想できたはずだ」

「そうだ。お前の敗因は、今までを踏まえる事もせずに俺を甘く見
やがった事と、“学力だけが全てじゃない事を証明したい”とかめ
かしやがるくせに、その学力で事を成そうとした矛盾がお前の敗因
だ。3ヶ月後にまた出直すこった」

「くっ……だが、せめて一矢報いてやらにや気が治まらねえ！ 最
後の勝負の科目は日本史、内容は小学生レベルで100点満点の上

限りだ!!」

ざわ……!

雄二の宣言にAクラスがざわめき、光一が目を細める。

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待ってください」

高橋女史がテストの用意をすべく、ノートパソコンを閉じて教室を出て行った。

日本史の小学生レベル、しかも上限なりという事は……

「成程な。霧島は小学生レベルの問題に関して、何か間違えて覚えている事から知ってるってわけか?」

「たったそれだけで気付くあたり、流石はAクラスの軍師様だな。まあそんな所だ。それとこの勝負で、翔子と付き合うかどうかを決めさせて貰う。さっきは全体での勝利かそうでないかなんて、言ってなかったからな!」

「……確かに言っただけだな。往生際が悪い事で」

「うるせえ。それと翔子、俺が勝ったらきっちり諦めて、光一と付き合っただけだからな!」

雄二の言葉に再度ざわめき、女子が反発の声をあげ始めた。

光一も流石にそれに黙る訳にもいかず、雄二にくっついてかかる。

「ちょっと待て雄二、お前何勝手に横暴な約束を事後に取り付けてやがる!?!」

「確かに翔子はウソはつかないだろうが、他の誰かが翔子を気遣って勝手なまねをしないと限らないだろうが。だから諦めるって口

「約束だけじゃ信用できねえ！」

「だからって……」

「……待って久遠。皆も、静まって」

喰ってかかる光一と非難する女子達を、翔子がやんわりと制止した。しづしづと引き下がる光一を余所に、雄二と向き合う頷く。

「……わかった。この勝負で負けたら、私は久遠と付き合うことを約束する」

「なっ！ おい、霧島!？」

「……元々が私の我儘から始まった以上、これは私の責任だから。久遠には悪い事してばかりだけど、負けたら私が責任を持って久遠の人生を保証するから」

「……わかったよ」

乱暴に頭をかきながら、光一はその場から下がった。

自分の席に座って、どっかとリクライニングシートに座る。

「……こんなことなら、念には念を入れておくべきだったな。くそっ」

「なによ、そんなに代表が信用できないの？ それとも、付き合うのが嫌なのかしら？」

「どっちも違う。雄二の往生際の悪さを考えれば、予想できなかった事じゃない……なのに見落とした俺のバカさ加減がムカつくだけだ」

「……アンタね。何でも噛んでも自分の予想通りに事が進むと思うな！」

「え？ ちょっと、何で腕を獲るの!？ ここは普通ビンタとか、ってちよっ！ その関節はそっちに……」

数分後

「やれやれ、酷い目にあつた」

「バカな事言うからよ」

腕をさすりながら、Aクラス教室に備え付けられているプラスマデイスプレイを見据える。

その先では、日本史担当の飯田教諭が問題用紙を裏返しのまま、2人の座る机に置いた。

「……ねえ光一、アンタどう見てるのよ？」

「聞かなくてもわかつてんだろ？ お前なら」

「……わかつてるわよ、あんたが避けようとした事なんだから。代表の勝算は低いんでしょ？」

「Aクラスは教室を守ればするものの、Aクラス代表はのぞまぬ交際を強いられる……か。笑えねえな」

雄二への怒りもあるが、流石に姫路瑞希に対しての態度の事もあり、光一に対しても同様だった。

霧島翔子が、犯罪者じみた男と付き合いななきゃいけないと言う、あの種の嫌悪感

それも本人が望んで居ないのだから、尚更だった。

「ちよつ、皆。光一に非はないじゃない」

「やめとけよ優子。俺みたいなのが霧島翔子と付き合い事になるかもしれないなんて、誰もよく思う訳ないだろ」

「……さつきも姫路さんが言ってたけど、良くそう平然としてられるわね」

「優子ならわかつてんだろ？」

光一の平然とした態度を直視できず、優子は顔をそらした。自分にも責任はある事なのに……と、自己嫌悪しながら。

「……ねえ光一」

「ん？」

「……もし代表と付き合う事になったら、もう少し行動を改めてよね？ アタシも協力するから」

「そうだな、俺の所為で霧島の評判に傷をつけてたりしたら申し訳ないし……ん？」

ふと横を見ると、Fクラスのメンバーがとある問題を見て声を漏らした。

その問題は、大化の改新の年号を問う物。

「で、出たよ！」

「でっ、でも、出たたってことは……」

「霧島は久遠の物になるってのか……？」

揃ったFクラス全員の言葉。

光一はそれを見て、完全に覚悟を決めた。

「……………ん？」

ところで、ふとある事に思い至った。

「……………待てよ。前提は確か、満点である事……だよな？」

「？ どうしたのよ光一？」

「いや、急に何かを見落としてる様な……なんだ一体？」

「よくわからないけど、Fクラスの策は間違えるとわかってる問題

光一と優子が呆れる傍らに響く轟音。

Fクラスのメンバーが雄二の詰め寄るべく、テスト会場である視聴覚室へと向かう音である。

「さて、ちとおしい気もするけど、これで霧島も晴れて想い人として事だ。めでたしめでたし、だな」

「……………そうね」

「あれ？ 優子どうしてホツとした顔してるの？」

光一の言葉に相槌うつた優子に、愛子がニヤニヤしながら茶々を入れた。

それに優子が顔を赤くし、周りの女子も色めき立ち始める。

「なっ、何言ってるのよ!？」

「あれ？ どうしてそんなにいきり立ってるの？」

「くだらない話してないで行くぞ。まだ事後処理が終わってないんだ」

「あれ？ 久遠君は気にならないの？」

「いや、気になるもならないも、俺もうフラれてるから……………やべ、思い出しちゃった」

目もとを抑える光一に、少し申し訳なくなったAクラスメンバー。

「……………えーっと、その、ごめん」

「……………いや、それよりもう行くっせ？」

「……………そうですね」

それから視聴覚室にて。

「……でも、危なかった。雄二が初戦小学生の問題だと油断してなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

座りこむ雄二に、翔子は思っていた事を口にする。

その様子を光一を始め、周りは呆れたように見ていた。

「さて、さっきあんな事まで言っただんだ。覚悟は出来てるだろうな？」

「ぐっ……わかってるよ。ところで、拒否権ぐはっ！」

「そんなモンあるかクソボケ！！俺を巻き込もうとしやがった以上、過激派筆頭久遠光一の名においてこの交際の破たんは絶対許さんからな！！」

「あーあ、火に油だね」

「光一も本気で悩んでたみたいだからね。代表と付き合う事に不満はないだろうけど、怒るのも無理ないわ」

雄二をスタンガンで殴り付け、怒鳴りつける光一

それを呆れたように見る2人は、そんなことを言い合っていた。

「さて霧島、交際おめでとう」

「……ありがとう。久遠には迷惑かけた」

「良いつてことよ。さて、戦争も終わった事だし事後処理は俺がやるから、デートでも行ってきたな」

「……うん」

雄二を引きずって行く翔子を見送って、やれやれと光一はFクラスの集団に

「さて、設備のランクダウンだけ……明久と秀吉、お前ら今日から雄二の動向を俺に報告するメッセンジャーになってくれ。そうすればランクダウンは見逃してやるが、3ヶ月の準備期間は適用する」
「それだけでいいの？」
「良いよ。別のお前らの設備のランクダウンにメリットなんてないしな」

「まったく、また勝手な」

「久保君、事後処理を代表に任されたの光一よ？」

「……わかっているよ」

「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ」

そこへFクラスへの死刑宣告の時間。

「……さて。皆御苦労さま、帰っていいぞ」

光一の号令で、Aクラスは解散。

その光一も明久と秀吉にすまんと頭を下げてから、帰路についた。

「……珍しいな。お前が俺と二人きりで帰りたいなんて」

「たまにはいいじゃない」

「誤解されたらどうすんだよ？　それが嫌で俺達と一緒に帰りたがらないのに」

「もうっ、折角アンタがAクラスに貢献した事を褒めてあげようと思っただのに！　人の好意を素直にとれないの！？」

「好意なんて向けた事ないだろうが」

「……」

優子は気まずそうにそっぽを向いた。

「で、これでしたら静かになるの？」

「ああ。Bクラスの根本をパシリにした事だし、Bクラスのメンバーには工藤を通して事実を報告してある。何か動きのあるクラスがあれば、けしかけるだけだ。Bクラスさえ押さえとけば、Fクラス以外でAクラスに攻め込む事もない」

「……抜け目ないわね」

「背後と地盤を固めるのは基本中の基本だ。Bクラスには悪いが、しばらくは俺達の土台になってもらう」

優子がそつと、光一の顔をけどられないように見てみる。

どことなく気が抜けたというより、少し空虚な様子を醸し出す様な顔。

試験召喚戦争を仕掛ける事が無くなったことに対してだろうと、優子は結論付けた。

「でも可能性としては0じゃないんでしょ？ だったらアンタの出番はまだまだあるんだから、がんばりなさいよ。頼りにしてるから」

「……！？」

「何よその顔？」

「優子が俺を頼りにって……明日はミサイルか？」

「どういう意味よそれ！？ 折角人が恥ずかしいのを我慢して褒めてあげたって言うのに！！」

「え？ ちよつ、待て！ 悪かった、俺が悪かったからそれだけはやめつ、ぎゃーっ！！」

こうして、Aクラス対Fクラスの勝負は終えて、試験召喚騒動は幕を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6864r/>

試験召喚のすすめ I F 過激派の過激派による過激派の為の試召戦争

2011年5月31日00時59分発行